

1955年9月21日第3種郵便物認可



「辺境の地に息づく地域ケア」をテーマに始まった学術集会＝9日、宮古総合実業高校体育館

へき地看護の在り方学ぶ ルーラルナースィング学会

きょうは市民講座

離島やへき地における看護や医療の課題や実践について情報を共有し、今後の取り組みに生かすことを目指す。

的とした日本ルーラルナースィング(へき地看護学)学会の第14回学術集会が9日、2日間の日程で宮古総合実業高校体育館で始まった。初日は教育講演やシンポジウムが行われ、全国から集まった関係者が島で暮らす人々の生活に寄り添った看護ケアの在り方について学んだ。

今回の集会は「辺境の地に息づく地域ケア」のテーマで行われ、同集会の大湾明美会長(県立看護大学)の講演や本永英治宮古病院長の教育講演などが行われた。大湾会長は「沖縄の離島に在る要介護高齢者の医療ケアを演題に講話した。離島におけるケアについて大湾会長は、「不利性の克服から『有利性の伸展』への発想の転換や、つながり(精神文化)を重視した取り組みなどの大切さを示した。

その方法については、生活者の視点を重視し、地域文化を生かしながら協働連携したケアの必要性を訴えた。本永院長も持続可能なへき地医療にとって、医師の確保に向けた人材育成の大切さや、住民参加による患者中心の医療ケア実現などについて講話した。午後からは、看護関係者のほか、地元出身ミュージシャンの下地イサムさんを招いたシンポジウムも行われ、それぞれの立場から離島における地域ケアの在り方やその特性に沿った医療、看護について意見を交換した。

2日目の10日は「市民公開講座」が行われ、人材育成をキーワードに高校生、教育者、保健医療福祉関係者による「島人(しまんちゅ)によるリレトリート」が行われる。

同学会は、へき地(過疎地域、豪雪地帯、山村、離島等)を含む地域の中核病院・保健所等に勤務する看護職や、へき地看護学(ルーラルナースィング)に関心を寄せている教育研究者が連携を図り研究の実施・積み重ねを図っている。

また、へき地で活躍する看護職を支援するところにも、その実態を明らかにし、看護の改善に向けた研究を実践。日本におけるより良いへき地看護学の構築を目指している。